

芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授
アート前橋チーフキュレーター

みやもと 宮本
たけのり 武典

⑮ 桐生で東京藝大のルーツを考える

東京藝大の美術学部には100年前から続く名物授業「古美術研究旅行」があります。3年生の必修カリキュラムで京都・奈良の社寺仏閣を巡るのですが、私が教える油画専攻では毎年5月に実施しています。今年の3年生も日本美術の古典を存分に満喫してアトリエに戻ってきました。

奈良出身の私は東大寺の近くで生まれ育ったので、彼らが古里の路地を歩いてきたなんて、ちょっと不思議でうれしい反面、京都・奈良のすばらしさを無邪気に語る藝大生たちに「では、その

伝統美を君らはどう継承しますか？」と問いたい気持ちがあくまくと沸き起こってきます。それは学生時代に私自身が悩んだことでした。奈良で日常的に触れてきた古典の美と、東京のアートシーンで求められる「美術」は切り離されていると、ずっと居心地の悪さを感じていました。

東京藝大油画専攻の始まりは139年

前に廻ります。欧米留学から帰国した日本洋画界のパイオニアたちが、西洋における最先端の思想としての油画を上の野の藝大に移植したのですが、これは近代以前の京都・奈良的な価値観へのカウンターとして設計された側面もあります。ですから、古美術研究旅行に感化された油画家が伝統回帰的な作品を作ってしまうと、東京藝大では「なぜ東京で？」「なぜ今？」のリアリティを失うか、保守的な印象にどうしても偏ってしまうのです。これは構造的な問題です。

私たち東京藝大油画が桐生の重要伝統的建造物群保存地区で制作研究を続けているのは、有鄰館やノコギリ屋根工場群が、まさにこの近代から現在までの移ろいを生々しく内包しているからです。6月6日と7日の2日間、今年のリサーチメンバーが桐生に集まり、重伝建で最初の合宿を行いました。これから制作・研究を重ね、11月の芸術祭「桐生（エナ）」でその成果を発表します。この地域活動は私たち藝大油画のルーツを継承し、問い直し、自ら再構築するための時間旅行でもあるのです。



▲▼6月に実施した視察の様子



パチリいい顔

桐生っ子

市内に居住する3歳まで(申し込み時)の桐生っ子を募集します。

右の二次元コードから電子申請でお申し込みください。



魅力発信課 ☎46 - 1049



こばやし うきょう 小林 侑恭 ちゃん
9か月



いしかわ しらゆき 石川 白雪 ちゃん
7か月



かねこ いちは 金子 一葉 ちゃん
4歳2か月



かねこ しき 金子 白桔 ちゃん
1歳10か月

広告